様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１０１０４
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３１００

研究課題名（和文）個人の学習文脈から捉える英語学習における動機づけの変化とそのプロセス

研究課題名（英文）The Changes and Transformation Processes of Motivation in English Learning from the Perspective of Individual Learning Contexts

研究代表者
三ツ木　真実（Mitsugi, Makoto）

小樽商科大学・言語センター・准教授

研究者番号：８０７８２４５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「学習者の動機づけの発生／変化のプロセスではどのようなことが起こっているのか」、また「過去の学習経験が現在（インタビュー時）の学習者の動機づけとどのように関連しているのか」に焦点を当て、質的アプローチを用いた学習者の個別具体的な学習経験の微視的な分析を通じて、学習者を取り巻く幅広い環境特性（社会的要因）と学習者の内面（心理的要因）といった観点から動機づけの変化のプロセスを捉えることを試みた。また、動機づけに基づく実際の学習行動にも目を向け、エンゲージメントの観点からも個々の学習文脈で行われた英語学習の分析を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
個人の学習文脈における動機づけ変化のプロセスを捉えるための方法論を一つ確立できたことが成果である。また、それを動機づけの隣接分野であるエンゲージメント研究にも拡張して分析を実施することができたことも成果の一つであり、新たな研究方法の提案として意義を持つ。また、この研究を踏まえ、個々の学習者固有の学習経験を回顧的かつ微視的に分析するアプローチを継続しながら、これまでの動機づけやエンゲージメントの研究における理論等を踏まえながら、学習者をより学習に関与させる先行要因は何であるかを明らかにする点を分野としての新たな課題として浮上させたことに意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study focused on investigating "what happens in the process of emergence and transformation of learner motivation" and "how past learning experiences are related to learners' current motivation". The aim was to capture the change in motivation by analyzing in detail the specific and individual learning experiences using a qualitative approach.This analysis considered the broad environmental characteristics surrounding the learners (social factors) and their internal states (psychological factors). In addition, attention was given to the actual learning behaviors based on motivation and conducted an analysis of English learning in individual learning contexts from the perspective of engagement.

研究分野：英語学習者の心理学（動機づけ、エンゲージメント）

キーワード：英語学習の動機づけ　英語学習者エンゲージメント　個人の英語学習文脈　動機づけの変化プロセス　質的分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2000 年代以降の英語学習における動機づけ研究では、動機は静的なものではなく動的なもので、常に変化するものであると捉えている。動機づけの変化を扱った研究のうち、例えば日本人英語学習者を対象としたものでは、中高大の時間経過の中で、特に中学と高校の 3 年時に動機づけが顕著に高まることや、中高大各年代の 2 年次そして 1 年間では特に 2 学期における動機づけの低下が一般的傾向であることを明らかにした（廣森・泉澤, 2014; Miura, 2010; Sawyer, 2007）。これらは、動機づけの変化が長期的な時間経過の中で現れることを明確に示している点で意義深い。一方で、このようなアンケート等による量的研究では、学習者個人の様々な状況は考慮されない。個々の学習者の動機づけの変化に目を向けた場合、誰もが同じような学習経験に基づいて動機づけの変化のプロセスを経ているわけでは決してない。また、複数の学習者が同じ状況に置かれたとしても、その状況は一人ひとりの学習者にとっては同じ動機をもたらさない。学習者はそれぞれ個別のアイデンティティを持っており、自らが位置づけられた社会における様々な関わりの中で動機を変化させているはずである。この点を踏まえ、Ushioda（2009）は、動機が学習者の置かれた固有の文脈における様々な要因を契機として発生・変化することを指摘し、質的研究によってそれを明らかに示していく必要性を強く主張している。

２．研究の目的

本研究では学習者の個別具体的な学習経験に着目し、「学習者の動機づけの発生・変化のプロセスではどのようなことが起こっているのか」という課題について、社会的要因および心理的要因の観点から、質的研究の手法を用いて明らかにする。この課題に対する回答を通じて、より効果的で具体的な指導実践、及び学習者の自律学習の促進に寄与すると共に、動機づけ研究のさらなる発展や深化にも繋がるものと考える。したがって、本研究の目的は、個人の学習文脈に焦点を当て、英語学習の動機づけを向上・低下させた具体的な学習経験と動機づけの変化の社会的・心理的要因を明らかにすることである。この目的を達成するために、本研究では以下の 2 つの調査を実施した。

調査１：英語学習者の語りに基づく質的分析を通じた動機づけ変容プロセスの可視化
調査２：個別具体的な英語学習文脈としての言語交換アプリを使用した教室外英語学習の動機づけとエンゲージメントの分析

３．研究の方法

３．１　調査１

（１）研究の目的

英語学習者の語りに基づく質的分析を通じて、社会的および心理的観点から動機づけ変容プロセスを可視化する。

（２）研究の方法

調査参加者は北海道の国立大学に通う大学生 1 名であり、インタビューをともなう次の 2 つの質的分析手法を用いて行われた。1 つは、「個人別態度構造分析（Personal Attitude Construct Analysis：以下、PAC 分析）（内藤, 2002）」で、あるテーマに対する個人ごとの態度やイメージをクラスター分析やインタビュー等を通じて抽出する手法である。PAC 分析によって抽出された印象的な過去の L2（英語）学習経験を基に、さらに個別具体的な L2 学習経験を自己のストーリーとして時系列で学習者に語ってもらった。2 つ目の分析手法は、「複線経路・等至性アプローチ（TEA）（安田・サトウ, 2017）」であり、人間の成長を時間的変化と文化社会的文脈との関係を踏まえて図式化して分析する手法である。PAC 分析の結果や、作成されたプロセス図を踏まえたインタビューの機会を継続的に持ちながら、学習経験のプロセスと動機づけの変化を可視化した。

３．２　調査２

（１）研究の目的

個別具体的な英語学習文脈として、言語交換アプリを用いた教室外英語学習を行う学習者の動機づけとエンゲージメントについて学習者の語りを通じて明らかにする。

（２）分析の方法

調査参加者は北海道の国立大学に通う大学生１名であり、PAC 分析を用いてインタビューに基づく質的分析を実施した。分析を通じて、印象的な過去の学習経験及び学習者固有の特定の文脈における英語学習（言語交換アプリを使用した英語学習）経験を抽出した。また、学習経験と動機づけとの関連を自己のストーリーとして時系列で学習者に語ってもらうことで分析を試みた。また、動機づけ変化と合わせて学習者エンゲージメント（Mercer & Dörnyei, 2020）の観点か

ら、実際の言語交換アプリを用いた学習行動についても分析を試みた。

４．研究成果

４．１　調査１

参加者は、中学１年生から高校１年時までを動機向上期以前、高校１年時から高校３年時までを動機向上期、高校３年時から大学２年時までを動機減退期、大学２年時から大学３年時までを動機回復期として認識しており、それぞれの変化のプロセスとその要因が以下のように可視化された。

(1)動機向上期以前

この時期の動機づけ変容の社会的要因は以下の通りである。中学での英語学習で英語は社会科などの暗記教科と一緒で暗記科目だと認識していた。高校１年時、担任でもあった英語教師の授業によって、１つの対応関係しかない定式化したルールが英語の文法で、それを覚えることが英語学習であるというビリーフを持つに至った。参加者は高校 2 年生の終わりまで英語学習を暗記教科として認識しており、文法や単語を暗記することにつまらなさを感じていた。また、英語を暗記するものと認識していたのは、授業等で実際に英語を使ってコミュニケーションをとる機会が少なかったことも要因として認識していた。動機が高まらなかった心理的要因には、「相性が悪い英語教師との出会い」から、「英語学習のビリーフの押し付け」を感じ、それによって「英語は暗記教科でつまらないもの」行った新たな信念や価値観の発生があったことが明らかとなった。

(2)動機向上期

動機の向上に繋がった社会的要因は３つの時期に分かれる。一つ目は、高校三年生になり受験を意識し始めた際、複数の参考書を通じて自分に適する英語勉強法を模索していく中で、効率性という点で最も理想的な参考書と出会った。自分に合う学習ストラテジーを見つけることにより、英語はただ暗記するものではなく体系的に理解するものだという認識が生まれる。また、当時は英語力とは受験英語で良い成績を取る力であるという認識を持っていた。この時期の動機の向上に繋がった心理的要因は、「参考書を使用した受験のための英語学習」から、「効率的な勉強による英語力向上の実感」がもたらされ、「英語学習とは言語を体系的に理解することで、英語力は受験英語で良い成績をとる力」という信念や価値観が新たにこの時期に発生していたことが明らかとなった。

２つ目の時期の社会的要因は、受験に向けた英語学習を進める中で、センター試験の過去問等の点数の上昇による英語力向上の実感があり、さらに夏休み後二回目の模試で学年一位の点数を取ったことで英語に対する有能感と受験のための英語力という点に自信がもたらされた。模試の成果を受け、クラスメイトから英語の効果的な勉強法を尋ねられたことがきっかけで、自分にとって英語が他者から評価されるためのツールであることも認識していた。この時期の心理的要因は、「模試で一位をとる」という経験が「英語に対する自信の向上と他者からの評価」につながり、それによって「英語は自分が他者から評価されるためのツール」という新たな信念・価値観があった。

３つ目の社会的要因は以下の通りである。一度良い成績を取ったことが過信となり英語の勉強量が低下する。センター試験本番では想定より低い点数を取るものの、大学には合格する。しかし、どちらかと言えば、自己選択ではなく、親の勧めを受けて進学する大学を決めたことから、大学入学後は自己選択による進学を目指し、仮面浪人を試みる。そのため、以前よりも受験英語としての英語を基礎から改めて勉強する。大学一年時は大学の留学制度を利用してアジア圏の国に留学を希望したが、落選した。それがきっかけで、大学一年の夏に祖母と初めてアメリカに行った。現地では英語を上手く使うことができず、コミュニケーションツールとしての英語の重要性を実感する。その後、大学の留学制度を利用して英語圏の大学に留学することを決意する。希望していた海外留学先の応募に落選したこともあり、留学に対する期待は大きいものであった。この時期の心理的要因としては、「祖母と初めてアメリカに訪れる」という行動が、「コミュニケーションのための英語学習の重要性」を認識させ、同時に「伝える、理解するための英語力不足」が自身の新たな信念・価値観として発生していた。

(3)動機減退期

動機の減退に繋がった社会的要因は次のとおりである。英語圏への留学が実現したものの、ホストファミリーが英語母語話者でなかったこと、現地の大学での ESL クラスでは全 15 人中 14 人が日本人であったこと、現地到着後１週間で歯が欠けてしまったことなどが要因でとなり、英語学習に対する動機が著しく低下し、積極的に英語学習に取り組むことができないまま留学が終了してしまう。この留学での経験から、帰国後は英語を学習する心情にならず、英語は映画や音楽を通して楽しむ程度の物でいいと思うようになった。心理的要因としては、「留学で英語学習に積極的に取り組めなかった経験」を踏まえ、「留学環境、学習を阻害する個人的な要因」がきっかけとなり、「英語は勉強するものではなくて楽しむものである」という新たな信念・価値観を発生させていた。

(4)動機回復期

動機の回復に繋がった社会的要因は次のとおりである。大学 2 年時の後期に大学のゼミ選択で第一志望のゼミに落選したことで一念発起し、英語関連のゼミを受け合格する。この背景（英語関連のゼミを志望したこと）には、過去の自分を見返したいという思いと、これまでの学習や学習経験を活かせるゼミがいいと感じたことが理由であった。3 年時にゼミが始まり、そこで少人数で英語を実践的に使用する経験を通じて、実際に役立つ英語の重要性に気づくこととなった。関連する心理的要因は、「ゼミで英語を実践的に使用する経験をする」ことで、「英語が１つの手段であることの実感」を受け、そこから「英語は役に立つもの（自己投資）」という新たな信念・価値観を発生させていた。

学習者の個々の学習文脈における過去の L2 学習経験の分析を通じてた事例研究の一つとして、学習動機の向上・減退・回復のプロセスに影響を与えた学習文脈を社会的・心理的要因から明らかにすることで、「英語学習とは定式化したルールのみを学ぶことである」といった、受験英語の学習に基づく価値観（英語学習ビリーフ）が、大学受験の失敗経験や留学で得た英語力不足の実感や、その後に英語学習と向き合い直す経験を通じて「英語学習とは自分自身に役立てるためにするもの（自己投資）である」という価値観に変容していったプロセスを示すことができた。特に、学習者が英語学習を「自分ごと」として捉えるプロセス、それを捉えられなくなるプロセス、そして再び捉え直すプロセスは、学習動機の変容と深く関連している可能性があることが示唆された。

４．２　調査２

参加者は個々の学習文脈として、言語交換アプリを使用した言語交換パートナーとのやり取りを通じた英語学習を継続的に続ける学習者であった。なぜアプリを通じた学習をするに至ったのか、またなぜ長期にわたって継続できるのかの 2 点を焦点としてインタビューに基づく質的分析を実施した。結果として、参加者の動機づけは言語交換アプリによる学習を機に動機づけが大きく向上していた。特に内発的動機づけの向上と理想　L2　自己の発生・保持に参加者の言語交換パートナーが影響を与えていたことが明らかとなった。この点に深く関わる社会的要因として、(1) 自分に言語交換パートナーがいること、(2)言語交換パートナーとともに学び合う学習環境、(3) 言語交換パートナーとのインタラクションの蓄積の 3 点が浮上し、これらが内発的動機づけの向上にポジティブな影響を与えていたことが明らかとなった。さらには、(1) 外国人と英語でコミュニケーションできる新しい自己イメージ、及び (2) 学習の継続にはリスペクトできる言語交換パートナーの存在が不可欠、という 2 つの新たな価値観・ビリーフが出現しており、これらが心理的要因として参加者の理想 L2 自己の発生と保持に関連していることも明らかとなった。以上のことは、教室外の学習者固有の英語学習文脈においても、他者（ともに学ぶ存在）が学習動機のポジティブな変容における重要なファクターとなる可能性を示唆するものである。

また、エンゲージメントの観点から分析した結果、参加者は過去（中高時代）の英語学習において、「英語の非実用性」や「英語使用に対する負の感情」といったネガティブな認識（英語学習に対する抵抗感）を有しており、英語学習に対するエンゲージメントが喚起されにくい学習環境にいた。しかし、大学入学後にその学習環境からの変化を求める出来事（英語以外の言語の学習やクラスメートの英語学習態度など）を通じて、英語学習に対する新しいポジティブな価値観の獲得や動機づけ信念としての理想 L2 自己を持つようになり、促進的マインドセットを発生させていた。そして、これこそが研究参加者が言語アプリを使用した学習にエンゲージするための強力な先行要因となっていたことが明らかとなった。

学習者エンゲージメントの四側面の観点からは、行動的エンゲージメントを高めた要因には、例えば、毎日必ず返信が来るといった言語交換パートナーの学習行動や態度が関連していた。また、パートナーから得られた訂正フィードバック等のランゲージングによって認知的エンゲージメントが引き出されたことが示唆された。感情的エンゲージメントについては、学習を共に楽しめる相性の良さといったパートナーの存在とやり取りへの肯定的な感情がその向上に非常に強い影響を与えていた。社会的エンゲージメントについては、互恵性と対等な関係性がバランスよく構築された協働型の学習が成立していたことが向上の要因であった。動機づけとの関連では、内発的動機づけの向上に言語交換アプリを通じた英語学習が大きく関わり、 またアプリを通じた教室外での英語学習に継続的に関与するためには、エンゲージメントを高めるための働きかけをしてくれる言語交換パートナーの存在が不可欠であることがわかった。以上のことは、教室外における学習者固有の英語学習文脈において、他者（共に学ぶ存在）、そしてエンゲージメントの４側面を充足させる他者とのインタラクションが、学習動機のポジティブな変容やエンゲージメントの促進における重要なファクターとなる可能性を示唆した。

＜引用文献＞

① 廣森友人・泉澤誠.（2015).「中高大における英語学習動機づけの発達プロセスとその背景要因」.『明治大学国際日本学研究』，第 8 巻第 1 号，37–50.

② Mercer, S., & Dörnyei, Z. (2020). *Engaging language learners in contemporary classrooms*. Cambridge University Press.
③ Miura, T. (2010). A retrospective survey of L2 learning motivational changes. *JALT Journal, 32*, 29–53.
④ 内藤哲雄. (2002).『PAC 分析実施法入門 [改訂版]「個」を科学する新技法 への招待』. 京都：ナカニシヤ出版.
⑤ Sawyer, M. (2007). Motivation to learn a foreign language: Where does it come from, where does it go? *Gengo to Bunka, 10*, 33–42.
⑥ Ushioda, E. (2009). A person-in-context relational view of emergent motivation, self and identity. In Dörnyei, Z. & Ushioda, E (Ed.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 215-228). Multilingual Matters.
⑦ 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ. (2015).『ワードマップ TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』. 新曜社.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Makoto Mitsugi
２．発表標題 English Learning Motivation in Personal Contexts: A Case Study of an English Learner Using a Language Exchange App
３．学会等名 ATEM (The Association for Teaching English through Multimedia) Hokkaido Chapter, Open Online Presentation Series
４．発表年 2021年

１．発表者名 松浦凪咲・三ツ木真実
２．発表標題 授業外の自律的な英語学習を促進する要因は何か ―言語交換アプリを使用する英語学習者の事例研究―
３．学会等名 大学英語教育学会（JACET）北海道支部・日本コミュニケーション学会（JCA）北海道支部・北海道英語教育学会（HELES）2021年度 合同研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Makoto Mitsugi
２．発表標題 The role of personal learning context in L2 motivation: Focusing on the emergence of new values and beliefs
３．学会等名 Multi layered language environment studies international symposium (Online)（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 三ツ木真実（第15章 教室外での英語学習とエンゲージメント）	４．発行年 2024年
２．出版社 大修舘書店	５．総ページ数 200
３．書名 エンゲージメントを促す英語授業－やる気と行動をつなぐ新しい動機づけ概念（ 廣森友人・和田玲（編著））	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関